

日本十進分類法の 成立と展開

日本の「標準」への道程 1928-1949

藤倉 恵一

Keiichi Fujikura

樹村 房

はじめに

『日本十進分類法』(NDC: Nippon Decimal Classification)は今日、日本の標準図書分類法として、日本図書館協会から新訂10版(2014年12月)が刊行されている。

1929(昭和4)年に青年図書館員連盟のもり・きよし(森清, 1906-1990)が発表したNDCは、発表後の十余年をかけて採用館が徐々に拡大していき、戦後の図書館界の再編のなかで、日本の標準図書分類法としての地位を得ることとなった。また、それにともない、森個人の著作から日本図書館協会分類委員会がその維持・改訂を継承することとなった。

しかしながら、NDCの成立から普及の過程について記されたものは、当事者たちの記録や回顧によるものが大部分であり、第三者によって語られたものは多くない。また、通史的なものについては、NDC巻頭に掲載された序文類や、情報資源組織分野の教科書などにわずかな記述を見せるのみで、今日それらが顧みられることも少ない。

筆者は2007年から日本図書館協会分類委員会の末席にあり、「当事者のひとり」といえなくもないが、できうる限り中立的な視点をもって、NDCの成立前後の背景と成立の経緯、そして、なぜNDCが標準分類法たりえるという評価が得られたかについて研究を重ねてきた¹。そこには、NDC旧版や関連文献を(なかば偶然)多数手にすることができたという個人的動機もある²。

他方、NDCは特に新訂8版(1978年)以降、主題の配置を大きく変えるような改訂方針を立てていない。それは、利用する館の書架への影響をなるべく控えたいなどいくつかの理由がある。このような考えはいつごろから出たものか、また初期のNDCがどのような方針で、どのような規模の改訂を行っていたのか、できるだけ仔細に確認しようと考えた。

本書では、これら歴史的経緯と変遷を可能な限り一次資料の比較をすることで概観したいと考える。

1 筆者の先行調査・研究については文献リスト(f1~f4)にまとめた。

2 本書巻頭「NDC写真ギャラリー」およびコラム参照。

本来であればNDC全体の通史として、戦後から現在に至るまでのすべてをもまとめたいとも考えたが、本書ではまずその黎明期から確立に至るまでの時代について整理したい。

NDCの時代区分について

筆者はこれまで数度にわたる研究を通じ、NDC第1版の刊行（とその前）から現在に至るまでを、次の三つの時代に区分した。

- 第一期（黎明期）：1928～1949年
森清の個人著作の時代（改訂増補第5版／増刷再版第8版まで）。
- 第二期（確立期）：1950～1986年
日本図書館協会分類委員会がその改訂を委嘱され、森が委員に参加していた時代（新訂6版から新訂8版まで）。
- 第三期（発展期）：1987年～現在
森の引退をはじめ、第一～二期NDCを支えた人物が退いた時代（新訂9版以降）。

ただし、この区分はNDCの各版の刊行を基準にしており、時期をまたいだ活動や議論が存在していたことはいうまでもない。あくまでひとつの目安として設けたものである。

調査対象について

本書では前項における第一期を対象とする。具体的にはNDC第1版から第5版（と第8版まで）の、特に第1次～第3次区分と序文等のコンテンツ、索引や助記表（補助表）の比較を行うが、それらに対する補訂や私家版などは原則として対象に含めない。

人名、用語、文字について

日本人名については、引用を除いて新字体での表記を優先し（例：「衛藤利夫」→「衛藤利夫」、「和田萬吉」→「和田万吉」）、生没年を括弧で付記する。

外国人名については、原則として姓のみの記述を基本とし、欧文表記と生没年を括弧で付記する。

NDCの原編者もり・きよし（森清）は、後年「もり・きよし」の筆名を主に用いていたが、1960年代以前は「森清（森清）」と表記されていた。本書では原則として「森清」「森」の表記を優先する（引用、書誌事項その他必要な場合を

除く)。

書名・雑誌名・分類名等については、原則として二重鉤括弧(欧文文献はダブルクォーテーション)で囲み、可能な範囲で、その原典に記載された字体を優先する(例:『圖研究』, “Manuel du libraire et de l’amateur de livres”)。よって、発行時期の違いにより同じ媒体でも表記が変わることがある(例:『圖書館雑誌』と『図書雑誌』)。また、本文中で繰り返し言及する場合は、新字体での表記を用いる。

その他、引用に際しては Unicode での記述が可能な範囲で極力原典に近い表記(文字)での転記を心がけたが、一部の文字は現用あるいは常用の表記とした(例:「情」や「述」などの旧字体は Unicode での表記ができないため、新字体で表記した)。また、引用ではなく本文で言及する際は必ずしも原典の字によらず、新字体で表記を行っている(例:「青年圖書館員聯盟」→「青年図書館員連盟」)。

ただし、微細な違いによる異体字、たとえば『日本十進分類法』の「進」は戦前、いわゆる二点之繞しんにょう(点が二つある「進」)で表記されており、これは通常使用されない字体であるため、現用あるいは常用の表記を用いている。

日本十進分類法に対する「NDC」の略記は本来「N.D.C.」のように省略を示すピリオドを介するが、本書では引用など特に必要な場合を除いて今日慣用される「NDC」に統一した(ピリオドのないNDCの表記は1940年代後半以降に見られ始めたが、書誌情報上では新訂9版まで「N.D.C.」と表記された)。引用においては「N.D.C.」「N・D・C」などさまざまな表記が見られたが、これは引用する原典の記述に拠った。

また、メルヴィル・デュエイの“Decimal Classification”(十進分類法)については、改訂のたび数度にわたって名称(特に副書名)や綴りが変化しており、また当時「D.C.」「DC」のように略記されたが、今日では「DDC」(デュエイ十進分類法: Dewey Decimal Classificationの略記)の表記が一般に用いられている。本書が対象範囲とする時代(1950年以前)は「D.C.」(DC)の略称が一般的に用いられていたが、NDC同様に必要な場合を除いて、今日慣用される「DDC」で統一する。

他の分類法も同様に、現在一般的に用いられる省略形(「EC」「LCC」等)を用いる。

「分類法 (System : 体系)」と「分類表 (Schema, Table, Schedule)」について、日本においてはしばしば混用されている。本書においては、明らかに識別可能な場合、固有名詞や引用、その他特に必要な場合を除いて原則として「分類法」あるいは単に「分類 (Classification)」という表現を優先して用いることにする。

参考・関連文献と引用について

本書はその性質上、さまざまな史料・文献から引用を行っている。巻末には、参考・関連文献リストを設けた。リストには直接引用したもの以外に、本書で採りあげた人物を記念した論文集や評伝・自伝・追悼文、図書館史や分類史に関する多数の文献を参考にしており、可能な限り掲載している。ここではおおざっぱな区分を設けたあと、時系列で並べた。

本文における註・引用については当該ページ脚注に記載し、巻末の文献リストの番号を参照し、簡潔な書誌事項を記述した（詳細な書誌事項は文献リスト参照）。文章や表等の引用については引用箇所も特定が容易なように、文献内のページも記録した。

和文文献は基本的に、参照可能な一次資料に拠っているが、文献によっては再録されたものを底本としたものもある（その際は注記している）。

海外文献については、和訳が存在しているものについては和訳を、和訳がないものについては原文を典拠とした。

引用文については、読みやすさの点から、すべて新字体に置換・表記することも考えたが、旧かなづかいの文章やカタカナ表記のものをどうするか、送り仮名の扱いなど問題がさまざま派生することと、極力同一性を保持したいと考え、前述のように Unicode で表現できる範囲において出来る限りの再現を試みた。句読点についても同様である。

誤字については、前後の状況から見て明らかな場合は修正しているが（本文にその旨を記述）、また、誤字か意図的か疑わしいもの等はそのまま転記している。

分類表の引用も、レイアウトやインデント等を含め原典の再現に努めたが、実用を目的としたものではないので、読みづらいものになっているかもしれない。その点をご容赦いただきたい。

本書の構成

本書は、第Ⅰ部「日本十進分類法の成立と展開」と、第Ⅱ部「日本十進分類法の変遷」および関連資料等で構成されている。

第Ⅰ部は、NDCの歴史をおおむね時系列に沿って述べる。

第1章「日本十進分類法の成立前夜」においては、まず西洋を中心とした、体系化された学問が記号による分類として割り当てられ、十進記号による体系を獲得するまでの流れとそれに対する影響、日本への波及について述べる。なお、NDC登場後（1930年代以降）の国外の分類史については、最低限の解説にとどめる。

第2章「日本十進分類法の誕生」では、間宮商店・青年図書館員連盟にあった森清がNDCのプロトタイプにあたる分類表案を公開し、その翌年、『日本十進分類法』の名を与えられて刊行されたNDCについて、どのように展開し、どのように支持されていったかを述べる。

第3章「日本十進分類法の発展と批評」においては、NDCに寄せられた当時の批判について、また、改訂されたNDCの経緯について述べる。

第4章「日本十進分類法の展開」においては、太平洋戦争中・戦後の激動の時代におけるNDCと周辺の人々について述べる。

第Ⅱ部は、原案から第5版に至るまでの諸版の構造を、序文類と第3次区分までの分類表、および付帯する諸表等の引用と比較を通じてまとめる。

第5章「日本十進分類法の序文類の変遷」では、各版の冒頭に掲載された巻頭言、序説、凡例等について、改訂の時系列に沿って述べる。

第6章「日本十進分類法の分類表の変遷」では、各版の第1次～第3次区分表の変化や、助記表（補助表）およびその他の表、索引について述べる。もちろん、改訂の大部分は第4次区分以降（小数点以下）でなされているので、本章掲載の内容だけで各版の改訂をすべて追うことができるわけではないが、第3次区分分まででも大小の変化を目の当たりにしていただけるだろう（改訂の要所は本文で言及する）。

また各章の合間には、本文に含むことが難しかった「筆者個人の視点」によるNDC史研究の余録を「コラム」として載せた。

巻末には、関連年表、参考・関連文献一覧、索引を設けた。年表は、本書で

採りあげた主要な出来事について収録した。文献一覧については前項で述べたとおりである。人名索引は、姓の順に排列した。事項索引は、NDC 以外の分類法や関連文献名、組織名等を収録した。

日本十進分類法の成立と展開

もくじ

はじめに i

第 I 部 日本十進分類法の成立と展開

第 1 章 日本十進分類法の成立前夜	3
1. 近代図書分類法の登場	3
2. わが国の分類法と十進分類法の伝来	22
3. 十進的分類法の普及と標準分類法の待望	33
4. 森清と間宮不二雄，青年図書館員聯盟	54
▶コラム 1 間宮不二雄の人となり	64
第 2 章 日本十進分類法の誕生	65
1. 和洋圖書共用十進分類表案（1928 年）	65
2. 日本十進分類法 第 1 版（1929 年）	71
3. NDC と同時期の一般分類法	74
4. 鈴木賢祐の支援：標準分類法をめぐる論争	80
5. 加藤宗厚の支援：NDC の実用普及へ	87
▶コラム 2 間宮商店のあった場所	96
第 3 章 日本十進分類法の発展と批評	97
1. NDC への批評と展開	97
2. 日本十進分類法 訂正増補第 2 版（1931 年）	110
3. 日本十進分類法 訂正増補第 3 版（1935 年）	112
4. 日本十進分類法 訂正増補第 4 版（1939 年）	114
5. 日本十進分類法 訂正増補第 5 版（1942 年）	115
▶コラム 3 衛藤利夫へのリスペクト	119
▶コラム 4 NDC のユーザー登録	120

第4章 日本十進分類法の展開	121
1. 日本の「標準」への道程	121
2. 分類委員会の誕生, 国立国会図書館とNDC	131
3. 日本十進分類法 抄録第6版 (1947年)	138
4. 日本十進分類法 縮刷第7版 (1947年)	141
5. 日本十進分類法 縮刷第8版 (1949年)	143
6. 日本十進分類法 新訂6版 (1950年) 以降のNDC	144
▶ コラム5 新訂6版について	155
▶ コラム6 NDCの装丁をめぐるあれこれ	156

第Ⅱ部 日本十進分類法の変遷

第5章 日本十進分類法の序文類の変遷	159
1. 巻頭言および謝辞	159
2. 本書の歴史	170
3. 凡例	172
4. 導言	174
第6章 日本十進分類法の分類表の変遷	191
1. 第1次区分表	191
2. 第2次区分表	195
3. 第3次区分および細目表	204
4. 助記表およびその他の諸表	270
5. 相関索引等	278

おわりに 283

関連年表 (1871-1950) 287

参考・関連文献 295

索引 305

第 I 部

日本十進分類法の成立と展開

明治・大正期，日本国内の図書館では基本的にその館固有の一館分類表を用いていた。

それらの多くはアメリカのメルヴィル・デュエイが考案・発表した十進分類法に倣って作成され，日本固有の事情である和漢書と洋書の双方に共用されることを目的として独自の改編がなされていたが，論理性に欠けていたり，主題索引が整っていないなど不整合もあった。

間宮商店の森清は1929年に日本十進分類法（NDC）を発表した。青年図書館員連盟の会員のいる図書館を中心に，戦前日本の標準分類法として採用館が拡大していき，戦後はGHQの監督のもと，学校図書館や国立国会図書館でNDCが採用されるようになり，日本の標準分類法となった。

ここでは，そこに至るまでの経緯やNDCに対する批評などを，おおむね時系列に沿って述べていく。

第2章 日本十進分類法の誕生

間宮商店に勤務し、青年図書館員連盟に参加した森清は、連盟機関誌にNDCのプロトタイプにあたる分類表案を公開した。そして翌年、『日本十進分類法』の名を与えられて刊行された。本章ではNDCがどのように展開し、どのように支持されていったかについて述べる。

なお、本章および次章でNDC各版の構成についても概説するが、詳しい内容の解説や表の引用は第Ⅱ部・第5～6章にて行う。

1. 和洋圖書共用十進分類表案（1928年）

1928（昭和3）年4月、森清は『園研究』1巻2号において「和洋圖書共用十進分類表案」¹を発表した。続く7月、同3号にもその案の続きとして相関索引等²が掲載された。以後この二つを総称して本書では「NDC原案」（または単に「原案」と呼び、1巻2号掲載のものを「記事前半」、3号掲載のものを「記事後半」と呼ぶ。

森は後年、この原案は間宮不二雄に説得されて公表に至ったものである、と回想する³。

私にとって分類表の試作は、あくまで個人的な趣味ないし愉しみであって少年の頃から試みていた。したがって図書館の実用に供するつもりはな

1 文献（a1）：森清「和洋圖書共用十進分類表案」（1928）

なお、NDC9版「解説」xiiページでは「和洋圖書共用十進分類法案」と誤記されている。また、図書館学テキスト等においても「和漢図書～」あるいは「～分類法案」などと記されていることがある。

2 文献（a2）：森清「和洋圖書共用十進分類表案Ⅱ相関索引」（1928）

3 文献（e58-1）：もり・きよし「NDC五十年雑記」（1979），p.391より

く、公表など考えてもいなかったわけである。本を仕分けることに関心があった私は、初め教科目による分類表を、のち図書館で使用していた表に倣って15部門分類表(1922)などを作っては、また改めるというノートにすぎなかった。間宮文庫の整理でDDC(12版)を使って分類するうちに、デシマル・システムの妙味に惹かれて十進法による試案を作成していた次第である。それを間宮先生の強い要請で「圖研究」に発表し、つづいて「索引」を寄稿した。

原案の構成はDDCの影響が色濃い。しかしこれはDDCの「本表」つまり体系だけを模倣し、数字による十進記号を用いて主題を並び連ねたということではなく、助記性や相関索引(Relative Index)などDDCが評価されるに至った要素の数々を含めて「模倣」したものである。これこそ森が序文でいうところの「似而非」十進分類表とは「似て非なる」点であろう⁴。

記事前半(序文、分類表)

記事前半は41ページにわたっており、その冒頭の5ページを費やしてこの分類表案成立に至る経緯を説明し(章見出しがないため、本書では便宜的に「序文」という)、5ページ目の半分に「基礎項目」(現在のNDCにおける「第1次区分表(類目表)」に相当)、続く見開き2ページで「第一要目表」(「第2次区分表(綱目表)」に相当)を載せ、残り33ページが「細目表」、最後の1ページが「助記表」(おおむね「補助表」に相当)である。

これら個々の内容と特徴については、第Ⅱ部で後のNDC各版と比較しつつ解説する。

記事後半(索引)

記事後半は前半の続きとなる47ページの記事を載せている。

これは特に解説文などを持たず、記事のほぼすべてが索引であり、相関索引が大部分を占めるが、地名や言語の索引などもある。これらについて詳しくは第6章「5. 相関索引等」(p.277-281)で解説する。

4 本書第1章「3. 十進的分類法の普及と標準分類法の待望」参照

原案の体系・排列順

序文（詳細は p.160～161）において森は、記号法は DDC の十進分類法を参考にしつつも、主題の順序についてはカッターの EC を参考にしたと述べた。

表 2-1 は、現在の NDC 解説で用いられている比較の表を応用して、EC、DDC と NDC 原案の体系順を比較したものである。なお、表 2-1 の EC は、文部省編『図書館管理法』（1900年）掲載の表 1-13（p.31）を底本として重要なもの（インデント上位のもの）のみを抜粋し、DDC の項目名は原案策定に直接参考にしたと思われる 12 版⁵ に拠った。

表 2-1 には主要な項目を挙げたが、例えば EC のクラス B（および Br の下

表 2-1 EC, DDC, NDC 原案体系順の比較

EC (1891)	DDC12 (1927)	NDC 原案 (1928)
A General works	000 General works Prolegomena	000 總記
B Philosophy	100 Filosofy	100 哲學及宗教(精神科學)
Br Religions	200 Religion	200 歴史科學
E Biography		
F History, Antiquities		
G Geography, Travels, Maps, Manners & Customs		
H Social sciences	300 Social sciences Sociology	300 社會科學
L Natural sciences	400 Filology	
Q Medicine	500 Pure Science	400 自然科學
R Arts (General works, Exhibitions, Patents, Metric arts)	600 Useful arts	500 工藝學, 有用技術
Vv Music	700 Fine arts	600 産業 700 美術
W Graphic and Plastic arts		
X Language		
Y Literature	800 Literature	800 文學
Z Book arts	900 History	900 語學

5 文献 (d5) : Dewey "Decimal Clasification and Relativ Index" Ed.12 (1927)

位に配された Cc) は、実際は表 2-2 のような体系である。

表 2-2 EC, DDC, NDC 原案における哲学・宗教の排列順

EC		DDC12		NDC 原案	
B	Philosophy	100	Filosofy	100	哲學及宗教 (精神科學)
Bh	Logic	160	Logic Dialectics	117	論理學. 因明
Bi	Psychology	150	Psychology	140	心理學
Bm	Ethics	170	Ethics	150	倫理學
Br	Religions	200	Religion	160	宗教. 神學

NDC 原案では論理學が 110 哲學の下位に置かれていること、また宗教が体系上 100 の下位にあることで階層がやや異なるが (これは現在の NDC でも同様)、EC と同じ順をとっていることがわかる。しかし、宗教の下位は異なる (後述)。ここでは、EC の順は DDC とは異なっている。

また、原案の排列順は EC のそれとおおむね近似していても、必ずしも EC を無原則に模倣あるいは援用したものではない。たとえば社会科学 (および関連領域) は表 2-3 のようになる。

表 2-3 EC, DDC, NDC 原案における社会科学の排列順

EC		DDC12		NDC 原案	
H	Social sciences	300	Social sciences	300	社會科學
Hb	Statistics	310	Statistics	350	統計學
Hc	Economics	330	Economics	330	經濟學
Hk	Commerce	380	Commerce Communication	670	商業
Ht	Finance	336	Public finance Taxation	340	財政學
I	Social problems	360	Associations Institutions	360	社會學及社會問題
Ik	Education	370	Education	370	教育
J	Government	320	Political science	310	政治學
K	Law	340	Law	320	法律學

統計が社会科学の先の方に置かれている EC の排列順はむしろ DDC のそれ (310) と同じで、350 に置いた NDC が独自性を見せている部分でもあり、DDC とも異なっている。また、NDC の商業は 600 産業の下に置かれ社会科学とは切り離されており、この構造は過去何度も批判を受けつつ、現在も踏襲されている。

排列順が EC とも異なるのは特に下位のクラスでは当然のことといえるが、

表2-2でも例に挙げたECのBr宗教学（Religion）の下位を見るとこのような例がある。

ECではBr宗教学（Religion）に続いてBt宗教（Religions）と展開され、Btは「ユダヤ教とキリスト教を除く（Except Judaism and Christianity）」と注記されている。「仏教（Buddhism）」は第6分類表までみても列挙されていないが、巻末の索引で仏教を検索すると、第1～2分類表ではB、第3分類表ではBr、第4分類表ではBt、第5分類表ではBy、第6分類表ではBzにそれぞれ位置づけられることがわかる（Buddhism……B, ³Br, ⁴Bt, ⁵By, ⁶Bz）。これにCキリスト教とユダヤ教（Christianity and Judaism）が続き、Caがユダヤ教、Ccがキリスト教となる。

表2-4では、ECの第6分類表⁶の排列をもとに抜粋したものと、DDC12版とNDC原案を対応させてみた。DDCおよびNDCにはキリスト教とユダヤ教を包括する分類はない。また上でも述べたようにECでは分類表に仏教は列挙されていない。DDC12版では仏教はバラモン教と同じ「294 Brahmanism Buddhism」に位置づけられている（ヒンズー教も294.5）。いっぽうNDCではユダヤ教は「199 雑宗教」にある。排列順はECとNDC原案は近似しているとはいえ、ECでは仏教、NDCではユダヤ教を「その他の宗教」として位置づけていることに変わりはない。

表2-4 EC, DDC, NDC原案における宗教の排列順

EC		DDC12	NDC原案
Br	Religion	200 Religion	160 宗教. 神學
Bs	Natural theology	210 Natural theology	163 神學
Bt	Religions	290 Nonchristian religions	
Bz	Local religions	294 Brahmanism Buddhism	180 佛教
C	Christianity and Judaism		
Ca	Judaism	296 Judaism	199.3 ユダヤ教
Cb	The Bible	220 Bible	193 聖書
Cbf	Old Testament	221 Old Testament	193.1 舊約聖書
Cbp	New Testament	225 New Testament	193.5 新約聖書
Cc	Christian theology	232 Christ Christology	191 教義神學. 信條論
D	History of the Christian Church	270 General hist. of church	198 教會. 牧師. 儀典

6 文献 (d2) : Cutter "Expansive Classification" (1891-1893), p.61-111 より

原案から NDC へ

森は、この原案の対象を「公共図書館を主要目的」としたうえで、その表題どおり国内刊行書を主とし、外国書にも共通に用いることができる分類法を企図していた。

また、序文（記事前半）の末尾で

此ノ體系ガ決シテ萬全ノモノトハ信ジナイノハ勿論ノコト、未完ノ部モ追追ト充シテ行ク考デアルカラ、是非ノ論ヤ不備ノ點等ニ就テハ高教ヲ借マレザランコトヲ祈ルモノデアル。

と述べ、さらにこのように結んだ。

ことわりがき

○細目表ノ或部分ハ細カク分類シ（900ノ如ク）、又或部分ハ大別ノミヲ掲ゲテ（430ノ如ク）アルガ、コレ等ニ對シテハ別ニ理由ハナイ。粗略ノ箇所モ追々ト細別シテユクツモリデアル。故ニ本表ノ區分ガ平均ヲ缺デキル點ニ就テハ次ノ機會マデ待タレン事ヲ望ム。

○相關索引モ本誌上ヘ同時ニ附スル考ヘデアツタガ時間的都合ノタメ不已得次號ヘ廻ス事ニシタ。

○本案ハ私ノ業務ノ餘暇ニ作ツテミタモノデ未ダ不十分ノ處モ多々アル事ト考ヘルガ、是等ニ對シテハ大方ノ示教ヲ待ツテ研究ヲ繼續シテミタイト考エテキル。

相關索引はこの予定どおり記事後半に掲載され、その文末においては、次のように記している。

斷り書き

1. 本號ニテ私ノ分類表案ハ大體纏マリマシタ。
2. 總表及索引ノ校正ガ不十分ノ為メ、多少誤植モアリ、又其後研究ノ結果訂正ノ必要ヲ感ジテ居ル點モアリマスガ何レ本索引發表後ニ於テ、諸君カラ御批評又ハ種々ノ御注意モ頂ケルコトヲ豫期シ、夫等ヲ一括シテ將來適當ノ機會ニ發表サセテ頂キ度イト考ヘマス。
3. 各位ノ忌憚ナキ御批評ヲ切望致シマス。

いずれも森の「未完」という考えを窺い知ることができる文章だが、この

「追々」「次の機会」「将来適當の機会」は1年を経ずして訪れることとなった。

2. 日本十進分類法 第1版 (1929年)

1929 (昭和4)年8月25日、間宮商店から『日本十進分類法：和漢洋書共用分類表及索引』第1版・350部が刊行された⁷。

この日は森の23歳の誕生日であり、『日本十進分類法』の名を選定推薦したのは間宮である。師の親心といえよう。

第1版について

第1版の装丁は臘脂色のクロス装、菊判であり、定価は4.50円 (連盟会員は4.00円)であった。現代の物価に換算すると9,000円程度ではないかと推測される。

『青年圖書館員聯盟會報』第2年第9號 (1929年)にはNDC発売の広告が以下のとおり掲載されている (図2-1, p.72)。

ワガ國ニ於ケル圖書分類法問題ニ對スル劃期的業績=N.D.C.ノ出版
(略)

先ズ100頁ニ亘ル總表ト、5,000ニ及ブソノ相關索引オ見ラレヨ！而シテソノ十進的構造ト助記の要素ノ遺憾ナキ應用オ討究セラレヨ！！而シテ亦ソレヲ批判セラレヨ!!!

またこの第1版に関しては明治薬科大学図書館の藤田忠雄が森の喜寿記念論文集に外装、内容についての考察を寄せている⁸。

NDC初版、正確には「日本十進分類法一和漢洋書共用分類表及索引一編者森清 第1版 (間宮商店 昭和4年)」(同書標題紙による)は、戦前～戦後の半世紀を超える年月にわたり、日本の図書館界の最も重要なツールの一つ、というよりは一つの法典的な存在となり、とくに司書としての職業的な使命感にもえる若き男女青年にとってはある種の聖典であり、シンボ

7 文献 (a3)：森清『日本十進分類法』(1929)

8 文献 (b13-1)：藤田忠雄「NDC初版について：日本十進分類法初期諸版論序説」(1983)『知識の組織化と図書館：もり・きよし先生喜寿記念論文集』, p.53-57

ルであった「日本十進分類法」(全版)の嚆矢の書であり、発端の書であることはいうまでもないことである。この資料の存在の重みを、それを手にして実感することのできた筆者は、その機会に恵まれていない人たちのため、同書の編纂の順序に従った解題を試みることにする。

本書では、藤田の記述を参考にしつつ、NDCの本体およびそれに先行する「序文」的なコンテンツ(序説・使用法など、本表に先行して掲載される一連の解説

58
青年図書館員聯盟會報
第2年 第9號

ワガ國ニ於ケル圖書分類法問題ニ對スル
劃期的業績—N·D·C·ノ出版

日本十進分類法

NIPPON DECIMAL CLASSIFICATION
森 游 編
審判216頁 本綴シロース表裝
定價 ¥ 4.50 (L.Y.L.會員ニ特價 ¥ 4.00)

先ズ100頁ニ亙ル總表ト、5,000ニ及ブソノ相關索引ヲ見ラレヨ!而シテソノ十進的構造ト助記的要素ノ遺憾ナキ應用ヲ討究セラレヨ!!而シテ亦ソレヲ批判セラレヨ!!!

—某大圖長ヨリノ來信—
前略—森君御編纂ノ十進分類法御上梓ノ由斯界ノ爲メ慶賀ノ至リ該分類ノ相關索引ハ誠ニ便利ニテ當館ニテモ總ニズ餘裕ニ參考ト致シ居リタル次第、各國ニモ購入方勸誘致シ取纏メ近日註文致シ在庫存ジテ居マヌ。—後略

發 行 所
合 資 間 宮 商 店 會 社
大阪市南區安堂寺橋通四丁目五
電話總機 2332 販賣部 59849
電信略號オサカエフマミヤ(モトメ屋)
東京事務所 東京市丸ノ内ビルディング547,電話丸ノ内(23)1874
福岡事務所 福岡市外箱崎町工科前

すぐ後
に立つ

圖書の整理法

乙 部 泉 三 郎 著
四六判 50頁 ¥ 50 送料 4錢
著者ノマエガキニ曰ク「圖書ノ整理法ヲ色々アリマス、本書ニ説明シマシタノワ最モ一般的ナ、實際的ナ方法デス。理論ヲナルベク省キマシタ。短刀直入整理ニ須要ナ點ダケヲ極メテ平易ニ書キマシタ」ト。
初メテ書物ヲ整理ナカル方ニワ是非御一覽ヲ御スハメシマス。

合 資 間 宮 商 店 會 社

図2-1 『青年図書館員聯盟會報』第2年 第9號(1929年)より

的記述)の構成内容や改訂での変更点につき解説していく(個々のコンテンツについては本書第Ⅱ部で扱う)。

第1版の構成

第1版の序文は、間宮による「叙」1ページと森による「はしがき」1ページ、さらに「序説」5ページ、「導言」11ページ(I 分類法ノ組織, II 使用指針, III 特殊取扱法)と続く。

その後が分類表であり、「主綱表 (MAIN CLASSES)」(第1次区分)、「要目表 (SUMMARY)」(第2次区分)の表が各1ページ置かれ、いわゆる本表である「總表 (GENERAL TABLES)」と続く。第1次および第2次区分表の名称は後のNDC各版とも異なり、また第3次区分表はまだ存在していない。そこに「助記表 (MNEMONIC TABLES)」が続く。原案の表よりも種類が増え8表になっているが、3ページで収まっている。

そして「相關事項名索引 (RELATIVE SUBJECT INDEX)」は4表用意された。DDCに倣ったものであるが、これだけの手厚い索引は国内では珍しいものであった(東京市の分類にも索引は用意されていたが)。

第1版への補訂

第1版に対しては翌1930(昭和5)年1月、間宮商店から全8ページの「日本十進分類法(第1版)補訂表(List of Alternations and Errata of Nippon Decimal Classification, 1st ed.)」が発行されている。誤植の正誤表以外にも、項目名称の変更や下位の区分などが一部変更されている。

たとえば611「農政學」は(他の綱目にあわせて)「農業經濟學」に変更になっているが、もっと大きなものでは、「666 海藻」ハ「666 養蛙 Frog culture」ト訂正、というように、まるで違うものに置き換わったようなところもある。

表6-14(p.215~224)に挙げた第3次区分(当時の表現では「第3段」)にも変更が出ている箇所があるが、これは補訂前のものをそのまま記載した(原案(表6-13, p.205~214)および第2版(表6-15, p.227~236)との比較のため)。

3. NDC と同時期の一般分類法

NDC の第1版が刊行されたことは無論今日からみればわが国の図書館史上大きな出来事であるが、わが国の分類法史上からも、この1929(昭和4)年8月という月は特筆すべき月であったといえる。

この1か月のうちに、乙部泉三郎『日本書分類表』⁹(8月1日発行『すぐ役に立つ圖書の整理法』付録)、毛利宮彦『簡明十進分類法』¹⁰(同15日発行『図書館雑誌』掲載)、そして森清『日本十進分類法』(同25日発行)と相次いで一般分類法・表(案)が公開されたのである。

NDC も含めこの三つの一般分類表の登場は、前章で述べてきた一館分類表の時代から、複数館で用いることのできる標準分類法の時代へと転換していく時機であり、その意味においても1929年8月は特別であったといえよう。

しかしここから、「標準分類法」というものをめぐる論争が巻き起こることになる。

乙部泉三郎『日本書分類表』

当時、県立長野図書館にあった乙部泉三郎(1897-1977)は、同年3月に開館した県立長野図書館のために作成した分類表を著書『すぐ役に立つ圖書の整理法』¹¹の付録として公開した。同書は受入から目録、分類に至るまで一連の整理技術を概説した23ページの本文だが、付録であるこの分類法は解説も含め24ページが割り当てられている。

冒頭「分類表の説明」で、この分類のメインクラスの排列順の根拠とその成立について次のように述べている(続けて、総記の意味と位置づけも述べる)。

図書館員と読者とのお互の便利の上から極力実用的にと云ふ趣意に下に作製しました。此分類法は各種の圖書全部を次の九門に分けました。その順

9 文献(e17-1)：乙部泉三郎「日本書分類表」(1929)『すぐ役に立つ圖書の整理法』, p.1-24

10 文献(e18-1)：毛利宮彦「簡明十進分類法」(1929)「圖書分類法の一つの私案」, p.214-221

11 文献(e17)：乙部泉三郎『すぐ役に立つ圖書の整理法』(1929)

序は先づ初めに精神あり、次に物質あり、そこに社會が成立し、社會には秩序、風俗が生れ、技術として實用的なるものと趣味的なるものとが生ずる。醫學、工學等の諸技術、産業、藝術は社會より發生する技術的なものである、そしてこれ等を記録するのに横には文學があり、縦には歴史があると云ふ一個の私見から此分類法の基礎を作りました。

これに「第一表 基礎表」(第1次区分)と「第二表 大綱表」(第2次区分)が1ページずつ続き、「第三表 日本書分類表」12ページが掲載され、さらに相關索引に相当する「分類表索引」8ページが収録されている。

原則として記号は十進記号3桁にとどまるが、「418 各科教授法」と「470 教科書及其参考書」は3桁の後ろに小数点をつけて4～5桁の記号を充てている。

また、冒頭の「分類表の説明」中に「共通区分」が各所に適用されていることが述べられているが、

これは總記形式区分と云つて必要に應じて本分類表を更に發展させる場合にも役立ちます。

と一種の補助表(当時の表現では「助記表」)の役割をもつことをうかがわせる。

表2-5 『日本書分類表』基礎表¹²

そして、この分類の出自は一館分類法だが、一般分類法として使われることを目的としたことを述べている。

表2-5と表2-6(p.76)には、第一表(基礎表)と第二表(大綱表)を挙げた。この並びを見ると、DDCやLCCを意識しているのは確かだが、NDCともECとも違うクラスの排列であることがわかる。表2-6は掲載にあたって若干レイアウト(分類記号と名辞の間のスペース)を調整した。また、46の項目名の間だけ「,」で区切られているように見

第一表
基礎表

- | | |
|---|-------|
| 0 | 總記類 |
| 1 | 精神科學類 |
| 2 | 自然科學類 |
| 3 | 社會科學類 |
| 4 | 教育類 |
| 5 | 應用技術類 |
| 6 | 産業類 |
| 7 | 藝術類 |
| 8 | 文學類 |
| 9 | 歴史類 |

12 乙部 前掲9, p.3より

表2-6 『日本書分類表』第二表 大綱表¹³

00	郷土資料	50	應用技術類
01	圖書目錄	51	醫學
02	圖書館	52	臨床醫學
03	百科事彙	53	衛生, 藥學
04	小冊子	54	土木工程學
05	叢書, 全集	55	機械工學
06	雜誌	56	電氣工學
07	新聞	57	鑛業, 鑛山學
08	稀觀書	58	造船, 航海
09	兒童圖書	59	造家學
10	精神科學類	60	産業類
11	西洋哲學	61	農業
12	東洋哲學	62	工業
13	倫理學	63	商業
14	心身論	64	養蠶業
15	心理學	65	林業
16	宗教	66	園藝
17	神祇	67	牧畜, 養禽, 養蜂
18	佛教	68	水産, 漁業, 鹽業
19	基督教	69	食品製造業
20	自然科學類	70	藝術類
21	數學	71	美術
22	物理學	72	書畫
23	化學	73	工藝美術
24	寫眞	74	彫刻
25	天文學	75	音樂
26	地文學, 地質學	76	演劇
27	生物學, 人種學	77	印刷, 製本
28	植物學	78	運動遊戲
29	動物學	79	娛樂諸藝
30	社會科學類	80	文學類
31	政治	81	日本文學
32	憲法, 議院法	82	支那文學
33	法律	83	歐米文學, 各國文學
34	經濟	84	小説戲曲
35	軍事	85	言語學, 語學辭書
36	統計	86	國語學
37	交通, 通信, 殖民	87	支那語學
38	社會思想	88	英語
39	社會問題	89	歐州語
40	教育類	90	歷史類
41	教授論	91	日本史
42	學校教育	92	東洋史
43	普通, 高等, 師範教育	93	西洋史
44	專門教育	94	傳記
45	社會教育, 特殊教育	95	地誌
46	獨學檢定, 學校案内	96	日本地誌
47	教科書及其他參考書	97	東洋地誌
48	家事	98	歐州地誌
49	風俗	99	アメリカ, 大洋洲, 極地地誌

えるが、これは誤字と見なさずそのまま転記した。

乙部は青年図書館員連盟の会員であり評議員であったが、図書館現場にあったため NDC 成立の過程には直接関与していなかったと思われる。原案や NDC 第 1 版の序文等にも乙部の名はない。なお、同書の広告は、NDC 第 1 版の広告に併載されていた (図 2-1, p.72)。

毛利宮彦『簡明十進分類法』

かつて早稲田大学図書館におり、アメリカ留学を経て退職後、当時「図書館事業研究会」を主宰していた毛利宮彦 (1896-1956) は、『図書館雑誌』117 号に「圖書分類法の一つの私案」¹⁴と題してこの分類を公開した。

その前文では国内外の分類法に対する著者の考えを述べ、

D.C の斯種図書館方面での強味も亦、こゝに在りと信ずる。此のポピュラリティーの點からして、我國従來の分類法に就いてみると、ホンノ今少し許りの手入れで、可なり効果的になるらしく考へられる。公平に觀て日本の分類法なるものも、相當苦勞して成長して來たのであるから……。一口に言へば在來のものを材料とし、これを整理すればいい。

とし、3 桁の記号を 7 ページにわたって載せている。この記号は十進記号に見えて、実はメインクラスに相当する最初の 10 区分は記号を持たず、その見出しのもとに区分が展開される形式を採っている。DDC をはじめ多くの十進分類法は 0 を総記とし 1/9 を区分枝に充てているが、この分類では 0/9 を使用するのが特徴といえよう。

表 2-7 (p.78) ではこの分類表から、2 桁部分を抜粋した。詳しくは表の後に解説が続くが、クラスの排列順は地誌・歴史を除いて NDC に近い。この記事の文末では、この分類の作成にあたっては「大正十五年に発表の、東京市立図書館の新分類表を、最も多く参考にした」と述べている (東京市の分類は表 1-18 および表 1-19, p.42~43 参照)。

続いて「簡明十進分類法」解説が 2 ページにわたって述べられる。その要点は以下のとおりである。

14 文献 (e18) : 毛利宮彦「圖書分類法の一つの私案」(1929)

表2-7 『簡明十進分類法』のアウトライン¹⁵

一般圖書	理學	文學・語學
000 地方誌料	400 理學	800 文學
010 書目	410 數學	810 日本文學
020 圖書館	420 物理學	820 和歌・俳句
030 事彙・年鑑	430 化學	830 物語・小説
040 叢書・全書	440 天文學	840 脚本・歌謠
050 隨筆・雜書	450 地質學	850 支那文學
060 新聞・雜誌	460 古生物學	860 外國文學
070 協會・學會	470 生物學	870 語學
080 稀觀圖書	480 植物學	880 日本語
090 兒童圖書又ハ委託圖書	490 動物學	890 外國語
哲學・宗教	醫學・工學	地誌・歴史
100 哲學	500 醫學	900 地誌
110 東洋哲學	510 基礎醫學	910 日本地誌
120 西洋哲學	520 臨床醫學	920 東洋地誌
130 論理	530 工學	930 西洋地誌
140 心理	540 土木工程	940 風俗・習慣
150 倫理	550 建築學	950 傳記
160 宗教	560 機械工學	960 歷史
170 神道	570 電氣工學	970 日本史
180 佛教	580 鑛山學	980 東西史
190 基督教	590 造船學・海事	990 西洋史
政治・法律・軍事	農業・工業	
200 政治	600 農業	
210 國家	610 農業・茶業	
220 行政	620 畜産業・養禽	
230 外交	630 蠶業・養蟲	
240 植民	640 林業・鑛業	
250 法律	650 水産業・漁業	
260 內國法	660 工業	
270 外國法	670 化學工業	
280 軍事	680 製造工業	
290 統計	690 家	
經濟・社會・教育	美術・技藝	
300 經濟	700 美術	
310 生産・分配	710 建築・造庭	
320 交換・消費	720 彫刻・工藝	
330 商業	730 書畫・骨董	
340 交通	740 印刷・寫眞	
350 財政	750 技藝	
360 社會	760 音樂	
370 社會問題	770 園藝	
380 教育	780 娛樂	
390 制度・實踐	790 運動	

15 毛利 前掲 10, p.214-221 をもとに作成

一、デューウキー氏の十進法を基本とし、之に我が國の特殊的立場からして、類、綱の配置其他に手加減を加へたこと。

元來デューウキー氏の十進法そのものゝ類、綱の配置には、歐米に於てはずいぶん以前から非難されてゐる。その排列の順序といふことにも異論があり得るが、寧ろ配分の不當といふことの方が、缺點としては大きい。

(略)

かゝる事實に徴し本分類表に於ては、社會科學を二類に分け醫學及工學に一類を與ふると同時に、哲學と宗教、語學と文學とは各一類に合併することにしたのである。これで大體平均し得たことゝと思ふ。

というように、DDC を根底にしつつその「欠点」を解決すべく類のレベルで手を入れたこと、毛利案と DDC との比較を述べている。

二、地理別を一定して其の記號を記憶的たらしむべく共通にしたこと。

ここでは、地理的な区分について日本・東洋・西洋の区別の必要性に言及し、「成るべく簡易なる形式に依る、記憶的の共通利用を試みた」として記号を充てたことを述べる(いわゆる助記性について)。この中で特徴を挙げるとするならば、地理に関する記号が「國別と言語別との二種あることも必要とされてゐない」としていることである。

三、類綱の中で普通必要と認められたものには、「總記」を配置したこと。

ここでは、DDC では本表上で省略されている下位の項目(綱)でも9種類の形式を列挙したことを述べている。「補助表(助記表)」という考えによつていない。

我國圖書館に於て實施されてゐる所のものは、隨所第二位の「綱」に於てもこれを設くるのであつて、之は圖書館の規模からして大體四位の細分を避けやうとしたことが、一因である。

なお、毛利はこの後も繼續してこの分類を改訂した。1936(昭和11)年に刊行した『圖書の整理と運用の研究』¹⁶には別冊付録として「簡明図書分類表」¹⁷が付されたし、さらに1940(昭和15)年には獨立して冊子として刊行された¹⁸。そして、『圖書の整理と運用の研究』は戦後1949(昭和24)年にも『圖

16 文献(e32)：毛利宮彦『圖書の整理と運用の研究』(1936)

17 文献(e32-1)：毛利宮彦『簡明十進分類表並兒童圖書分類表』前掲16別冊附録

『図書館学綜説』¹⁹と改題して改訂されているが、ここではこの分類は掲載されていない。

4. 鈴木賢祐の支援：標準分類法をめぐる論争

この時代の図書分類法に関する研究者の一人として、当時和歌山高等商業学校図書課にあった鈴木賢祐（1897-1967）がいる。彼の評伝²⁰によると、

一九二七（昭和二）年『図書館雑誌』に「わが国図書館の浄化」の一文が登場。以後堰を切ったように次々と論文を発表。青年図書館員聯盟の結成も刺戟になったのか、一九二八年聯盟から『圖研究』が創刊され、発表の舞台が広がる。

とある。鈴木は連盟の結成当時から常にその中核にあり、宣言や綱領は鈴木の手になるものであった。評議員や理事員なども歴任している。また、戦後の日本図書館協会にあっては分類委員会の委員として長らくNDCに関わっている。

森がNDCの原案を発表した当時の鈴木は31歳前後であったからまさしく「少壮」とよぶにふさわしい年代だったが、当時の鈴木はベーコン（Corinne Bacon, 1865-1944）の『圖書分類』（“Classification”, 原書1916年）の翻訳²¹刊行をはじめ、『圖研究』『図書館雑誌』などの誌上にカッター、ボーデン、リチャードソン、セイヤーズ、ブラウンなどの文献を次々訳出していた。

その性格は、上述の評伝によれば「きびしい人」「矜持と気骨」「峻烈」、そして「反骨」という表現を用いて語られており、特に『図書館雑誌』において鈴木はしばしばきびしい論調で批評を行っている。鈴木が遺した文献の数々を追うことで、分類法をめぐる議論が当時どのように展開していたかが如実にわかるが、特に鈴木が対象としていたのは、図書館独自の一館分類法よりも、複数の図書館で統一的に用いられる「標準分類表」への批評であった。

18 文献（e37）：毛利宮彦『簡明十進分類表並索引』改訂増補 2600年版（1940）

19 文献（e49）：毛利宮彦『図書館学綜説：圖書の整理と運用の研究』（1949）

20 文献（b11-4）：升井卓弥「反骨の図書館学文献学者 鈴木賢祐」（1983）『図書館を育てた人々 日本編 1』, p.148-149より

21 文献（d6）：ベイコン；鈴木賢祐譯『圖書分類』（1927）

前章でふれた中島猶治郎への批判²²もそのひとつだが、奇しくも同月に揃って刊行された乙部泉三郎、毛利宮彦、森清の三つの分類法に対する論評こそ、鈴木の本骨頂と言えるのではないだろうか。

鈴木による比較検証

鈴木はこの三つの分類表を対象とし、『図書館雑誌』誌上において「どれが標準分類表か? : 乙部案—毛利案—森案」²³と題して2回にわたる比較レビューを行った。

鈴木はこの論考の冒頭において、以下のように述べている。

今日のわが國の圖書館界において、當にやるべく又やつてやりばえのする仕事の數ある中に、わけても標準分類表の構成は、最も重要、且つ最も花々しい仕事の一つである。

そして鈴木はこれらの三つの表を、量的な面よりも質的な部分をまず基準とし（もし量を基準とすればもっとも評価されるのは単行書であるNDCであることは自明である）、一定以上の公平性をもって比較検討している。

一、でき得る限り事物の順序には従はねばならない。（中略）それ故に分類法は複雑の順序、歴史の順序、換言すれば進化の順序に従はねばならない。

二、緻密にできてゐなくてはならない。

三、純粹記號、又は十進數字を含む混成記號を用ひ、如何なる新主題の挿入にもたへるやうな、記號法を具へてゐなくてはならない。

四、詳細な索引（列擧索引又は相關索引）を具へてゐなくてはならない。

（本文をもとに構成、一の（中略）は原文ママ）

という「分類表の標準」を設け、これをもとに三つの表を比較した。この「標準」は鈴木の独創ではなく、リチャードソンの考える「實用分類法の標準」²⁴をもとにしており、一・二はリチャードソンの原案を、三・四はリチャードソ

22 文献 (e14) : 鈴木賢祐 「「標準分類表」中島氏案の難點」(1928)

23 文献 (e19, e20) : 鈴木賢祐 「どれが標準分類表か? 乙部案—毛利案—森案」(一, 二) (1929)

24 文献 (d8) : Richardson ; 加藤宗厚譯 「分類法ノ理論及實際」(1928)

ンへの対案として、セイヤーズの見解²⁵を汲んで整理したものである。

まず(一)順序の面について、乙部案はブラウンの件名分類法(SC)のような「一種の客観的進化順序」ではないかと推測するが、排列として効果的でなく「われわれの観念をもつては理解し難い」としている。また毛利案に対してはDDCを毛利が独自に改善したものとしているが、結局のところ「大體において朝三暮四的であると評するの外はあるまい」とする。そして森案つまりNDCに対しては、論拠としてまずECの順序が理論的であったと上で、それを十進記号に変換したという点で評価している。全面的に高い評価をしたわけではないが、「何れにもせよ、森案が図書館用分類表として、われらの標準の第一要件に充分適合してゐることは明らかである」と結論づけた。

次に(二)緻密の度については、量的な要素が絡んでくるため単行書であるNDCにアドバンテージがあるのは間違いない。しかしそれも、毛利案の解説を引き合いにして、蔵書量に対する緻密の度について分析を行っている。またNDCについても「極めて仔細に見て行けば」取り扱いの不均等などのような「あら」があるとは指摘しているが、結局「われらの標準の第二の要件に適合する一般分類表は、私の知つてゐる限り、わが國で森案が唯一のものである」と締めくくる。

続けて(三)記号法としては至って簡潔に「三案共に十進法である」ということでこの点においては三つの分類に対して特に甲乙をつけていない。

最後に(四)索引について、まず索引を持たない毛利案は除外し、乙部案とNDCの差は「詳細」の差つまり本表における項目の数に起因するものであるとする。

最終的にはNDCを「わが國における近代図書館事業始まつて以来の大収穫であり、斯業の發達程度を物語る好個の記念碑である」とまで賞賛した。

毛利宮彦の反論

だが、当時の鈴木活動の場が青年図書館員連盟の『園研究』にあったこともあり、この批評は結果的に連盟の身内である森のNDCを高く持ち上げたも

25 文献(d10, d11): Sayers; 加藤宗厚譯「セイヤーズの分類入門」(一, 二)(1928-1929)

のとも見ることができた。鈴木 of 考察は公平な視点であったといえるが、NDCを称揚する文章には若干の意図を感じなくもない。したがって、当然この論考は当事者である毛利の反論²⁶を呼ぶこととなる。

毛利は、鈴木 of 批評の対象に自己の「私案」が採りあげられたことにまず反論している。特に量的な面で他の2者に及ばないことから「索引どころか所要の綱目に参照を附することさへも、差し控へた」と弁明する。そのうえで、鈴木が論題に掲げた「標準分類表」という語に対しその定義と解釈、比較の手法について批判した。

そもそも「標準分類表」といふ言葉は——英語ではスタンダード・クラシフケーションとでも言ふのか——餘り耳にせぬ語であるが、譬へ在り得るとしても、或は殆ど意味を成さぬのではないかと思はれる。何故なれば、「標準」と言ふからしては「最高」とは意義を異にするとしても普通には三つも四つも標準は在り得ないであらうし、若し在りとすれば「標準の標準」が必要であつて、何のことかサツパリ解らなくなつて終ふからである。今これを事實に徴してみても、數ある内外の圖書の中に斯ることを、標榜してかゝつたものは殆どないであらうし、D・C・E・C・L・Cの諸法に對しての如き、何れも「代表的」又は「典型的」の分類表としての意味に於て、これを推薦し説明し或は夫々の長短につういて批判するのである。言ふまでもなく「代表的」又は「典型的」といふ言葉は、その卓絶を推稱した形容詞であつて、極めて自由な語意のものである。誰か是等諸法の一つを採つて、之こそ「標準分類表」なりと言ひ得るものぞ。然し乍ら茲に或る人があり、ヨク前人未發の見地から、唯一の分類表の偶像を建立しやうとも、蓋しそれは頗る勝手であらう。

さらに毛利はNDCに対し「未だ之を手にしてゐない」としながらも、鈴木 of 文章から「蔵書冊數と分類の精粗の問題は全く度外視されてゐて、「圖書在つての分類表」でないこと」を問題視している。また、NDCの目的が「圖書の分類のためのものか、目録の分類のためのものか、或は兩者のためのものか、それとも何れでもないのか」と書架分類・書誌分類への対応に関する疑問

26 文献 (e21)：毛利宮彦「所謂「標準分類表」の批評について」(1930)

第 II 部

日本十進分類法の変遷

日本十進分類法（NDC）は、森清の個人著作であった時代においては、数年おきに増補改訂がなされていた。

問宮商店から発行された第1版～第5版までの間は、巻頭に森や問宮による各版への巻頭言が載せられたが、そこからは単に改訂内容だけでなく、当時の編者・発行者らの置かれた状況や図書館界の動きをも窺うことができる。

ここでは、これら序文類を追いかけ第I部の内容を補うとともに、分類の構成が各版の改訂で大なり小なりどう変化したかを第3次区分表（3桁・1,000区分表）まで比較しながら述べていく。

また第II部においては、NDCからの引用については脚注を例外的に省略または略記する。

- ①文章の引用箇所の出典が明らかであるもの（例：NDC第1版の「はしがき」からの引用文）については本文から版とページが特定できるため、脚注を省略した。
- ②図表の引用がNDCからである場合は、「NDC〇版、（ページ）より」と略記した。

第5章

日本十進分類法の序文類の変遷

NDC各版（縮刷第8版まで）の巻頭には、その版に対する森や間宮による序文的な文章が置かれている（本書では便宜的に「巻頭言」という）。版ごとに事情は異なるが、それはNDCが成立するまでの経緯や、周囲からの反響や、戦中の情勢下において森や間宮らがNDCとどう向き合っていたかを知ることができる資料である。

特に、版が重なるにつれ普及と改訂が急ピッチで進んだことが覗え、いっぽう森が思ったように改訂を進めることができなかったことなども読み取れる。

本章では、第8版に至るまでの諸版に掲載された、分類表に先行する巻頭言や解説類、凡例等の変遷を追う。

1. 巻頭言および謝辞

巻頭言は、第2版以降も旧版に掲載されたものがすべて再録されているため、第8版を手に入ればすべての版の巻頭言を一覧することができる。こうして調べてみると、間宮はNDCに対する思い入れが強く、森は大規模改訂を試みたいのだがなかなか着手・達成できないことへのもどかしさのようなものが見て取れる。

また巻頭言に続いて、謝辞が半ページ～1ページ掲載されている（第2版以降）。ここでは、NDCの分類項目や体系は図書館界や専門家らの意見を聞きながら構築・改訂・維持されていったことが覗える。

この謝辞で注目に値するのが、牧野富太郎（1862-1957）の名が挙げられているところである。牧野といえば植物分類の大家であり、牧野の体系がNDCの初期から援用されていたことは意義が大きい。

和洋圖書共用十進分類表案（1928年）

「和洋圖書共用十進分類表案」（本書では「原案」と呼ぶ）は雑誌記事であったため、記事前半の冒頭に置かれたこの文章には特に名称が与えられていない。2章では便宜的に「序文」と呼んだ。

NDCの嚆矢として森は、次のように標準図書分類法の必要について述べた。

現在ノ我國圖書界ニ於テ急務トスルコトハ多々アルガ、就中必要視サレテ居ルモノハ、我國ノ立場カラ立案シ、然モ共通のニ使用シ得ル標準圖書分類法デナケレバナラナイ。此事ガ如何バカリ必要視サレテキルカハ、各種ノ會合ノアル毎ニ、其ノ必要ヲ高唱サレ、最近設立セル青年圖書館員聯盟ノ規約中ニモ、ソノ一項ガ掲ゲラレテ居ルノデアル。尚昨年ト一昨年ノ全國専門高等學校圖書館協議會ニ於テモ、同會理事者カラ分類表ノ骨子案ガ提出サレタガ未ダ確定トマデハ進デ居ナイ様ニ聞ク

当時の国内は一館分類表が主流であり、館が異なった場合「利用者や図書館員が分類体系を理解できない」という問題が存在する。この分類表案はそのような標準分類法に対する待望を受けてのものであることと同時に、青年図書館員連盟の目的の一つである「図書館管理法準則の確立」に沿ったものであることを述べた。

続いて森は、英米ではDDCやカッターの展開分類法、米国議会図書館分類法、ブラウンの件名分類法などがあると紹介しつつも、それらが日本国内の資料を分類するには不十分であることを述べた。そして、当時多数存在した国内の一館分類法の多くが主に十進記号法を表層的に模したことに対しては、1章(p.52-53)でも引用したように「似而非」十進分類表であるという問題提起をした。他方、国内の他の分類では軽視された相関索引の有用性についても言及している。

そして、記号法としてアラビア数字とローマ字を用いる分類が存在する中で、この原案が「世界的共通符號デアル數字」を用い、区分は「Dewey式ヲ採用」したと述べた。十進法を用いることについて、バウカー（Bowker, Richard Rogers, 1848-1933）の論を引用したり、杜定友の『世界図書分類法』（Universal Classification）とDDCのメインクラスを比較している。

最終的に、この分類のメインクラス（大綱）の排列を示し、次のように述べた。

以上ノ如キ大綱配列ヲシタ理由ハ、Cutter ノ Expansive Classification ノ中 Introduction for the smallest library ニ Cutter 氏ノ理想トシテ、七大綱目ガ掲ゲラレテ居ル其ノ順序ハ理論的ニミテ餘リ批難サルベキモノデナク、又實際的ニハ D.C. ニ比シテ、更ニ便利デアロウトノ考ヘカラスク排列シタモノデアル。

加藤宗厚は後年、この原案からさらに改良された NDC の主題排列について「NDC 初版を見て、DC の欠点であるクラスの配置が EC によって是正され、DC のアメリカ本位に対して日本中心に是正され、一般形式細目、歴史と地理区分の助記性、互角区分と文学区分の助記性などをたくみに取りいれている。これこそ真の DC の日本化である」と評した¹。

次号（記事後半）は冒頭、相関索引の凡例から書きはじめており、こちらには序文めいたものはない。森の文章は、記事の末尾に 2 章（p.68）で示した「断り書き」のみである。

第 1 版（1929 年）

第 1 版では、問宮による「叙」が巻頭に掲載され、森による「はしがき」がそれに続いている。いずれも書かれたのは「昭和 4 年 2 月」となっている。

問宮の「叙」では、NDC の成立にあたって次のように語っている。

明治 5 年ニ芽オ吹イタ我國ノ近代的圖界デ、今日マデ 1 卷ノ分類法書モ公刊サレナカッタノワ實ニ不思議ノ至リデアル。

（略）

森君ノ案ガ果シテ私ノ希望ノ一ツオ實現シ得ルノモノデアルカ否カワ不明デアルガ、兎モ角 50 有餘年ノ我國圖運動中ニ顯出シナカッタ、公刊ノ分類法書オ、爰ニ始テ斯界ニ投ジ得タコトワ、何トシテモ劃時代的ノモノト考エル。

ここでいう明治 5（1872）年とは、文部省による書籍館の設置を指している。

1 文献（e55-2）：加藤宗厚「NDC・その生い立ちと戦前までのこと」（1965）